

令和7年度 ヤングケアラーに関するアンケート調査報告書

(1) 調査目的

ヤングケアラーの早期発見や直面している課題を把握し、今後のヤングケアラー施策に生かすことを目的とする。

(2) 調査対象

市内小中学校及び高校の全校児童生徒（小学校は5・6年生のみ）

令和7年度 調査実施校 **12校**

（張碓小、桂岡小、銭函小、望洋台小、桜小、長橋小、幸小、塩谷小、銭函中、望洋台中、桜町中、長橋中）

※その他の市内小中学校及び高校は令和8年度に実施予定

(3) 回答結果（別紙参照）

・在籍児童数 1,251名 回答児童数 987名 回答率 78.9%

・ヤングケアラー **3名**

※家族の何らかの世話をしており、世話をすることに対する負担感について「**とても負担になっている**」と回答した子ども（問8参照）

・ヤングケアラーとなるおそれのある子ども **30名**

※家族の何らかの世話をしており、世話をすることに対する負担感について「**少し負担になっている**」「**あまり負担はない**」「**ほとんど負担はない**」と回答した子ども（問8参照）

(4) 考察

① 問4「ヤングケアラーという言葉は今までに（講習会前までに）聞いたことがあったか」との質問に対し、「聞いたことがあり、内容も知っていた」と答えた児童生徒は約24%と少なかつたため、ヤングケアラーの理解を促進する取り組みは有効と考えられる。

② 問5-2「世話が必要な人は誰か」との質問に対し、「きょうだい」が約37%と一番多く、次いで「祖母」「祖父」となっており、問5-4「その世話は誰がしているか」との質問に対し、「母親」「自分」と回答した人数が全体の半数を超えている。また、問6「あなたがしている世話の内容はどのようなものか」との質問に対し、「家事」が約27%と一番多く、次いで「感情面のサポート」「きょうだいの世話や保育所等への送迎」となっている。このことから、母親が主にダブルケア（育児と親の介護を同時に行う状態）を担っており、そのしわ寄せが子どもに及んでいる可能性が考えられる。

- ③ 問5-4で自分が世話をしていると回答した50人の負担感を聞いたところ（問8）、3人が「とても負担になっている」と回答しており、全員が問7の困り感を抱えていた。何らかの世話をしており、困り感を抱え、とても負担になっていることから、ヤングケアラーに該当すると考えられる。また、ある程度の負担感があるものは、将来的に負担感が増大する可能性があるため、ヤングケアラーになるおそれのある子どもと考えられる。
- ④ 問9「あなたは世話を必要としている家族のことや悩みを誰かに相談したことはあるか」との質問に対し、70%が「ない」と回答し、問11「（こども家庭センターへの）相談を希望するか」との質問に対し、4%が「はい」と回答しているため、家庭内のことを他者に相談することに対するハードルが高いことから、気軽に相談できる手段の検討や相談機関に対するハードルを下げる取り組みが必要である。